

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第46号 2018年10月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP(最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 静岡大学雄蕨寮図書室の蔵書目録作成を終えて	猪瀬 貴大	2
逸話と世評で綴る女子教育史(46) —同志社女学校はじまる—	神辺 靖光	6
伊藤儀助(二高 1926 年卒)の旧蔵写真帳を手にして —伊藤儀助と二高卓球部のかかわり—	谷本 宗生	9
近代日本における大学予備教育の研究(39) —二年制予科 関西学院大学①—	山本 剛	12
教育史研究の周辺⑤ 学校を経由した社会移動研究(地理移動編①)	加藤 善子	16
河合榮治郎の「女性の教養」観⑤	末松 亜紀	20
明治後期に興った女子の専門学校(1) さきがけ—明治女学校の開校	長本 裕子	24
大阪市の女子教育⑩ —大阪市立大学家政学部の設置—	徳山 倫子	29
京都帝国大学創立期における寄宿舎像の模索	富岡 勝	33
我流・文献紹介(7) —6・3・3 制の強行と「学習指導要領」の作成—	神辺 靖光	37
刊行要項(2015年6月15日現在)		41
短評・文献紹介		42
会員消息		43

コラム
静岡大学雄萮寮図書室の
蔵書目録作成を終えて

いのせ たかひろ
猪瀬 貴大
(静岡大学人文社会科
学部経済学科 4年)

筆者の住む雄萮寮は、旧制静岡高等学校寄宿寮(のち仰秀寮)の流れをくむ寮であり、1969年に移転・建替え・名称変更はされているものの、旧寮の伝統¹が随所に受け継がれる寮である。また、3階不二寮内の図書室には旧寮以来の蔵書および寮生名簿の一部²が眠っており、2

階穆寮内の書記室には1960年代以降の寮自治会や静寮連(静岡県学生寮自治会連合)関連の資料が、ダンボールに入れられ堆く積まれていた。これらの保存体制は劣悪で、両室はさながらゴミ置き場であった。筆者は専攻と無関係ながらこれらの蔵書および資料の大学への寄贈を思い立ち、1年強の間、先生や事務員への相談と資料の保存状態改善に取り組んできた。大学はすぐには保管場所を用意できないため、寄贈の見込みは立っていないが、「雄萮寮には保存すべき資料があり、それに取り組む寮生がいること」を大学側に認識してもらえたことは現段階における収穫であろう。静岡大学は未だ外部に開かれた全学レベルのアーカイブズ組織を有しておらず、発展途上の段階である。



3階図書室書架

先日寮蔵書約2700冊の目録作成を完遂した。大半が1人の作業であり怠けがちであったことに加え、旧制高校時代の寮蔵書は寄贈者や保存状態、蔵書印や書き込み等の記録をしていたところ、思いのほか膨大な時間がかかってしまった。以下は、その旧制静高寮蔵書の特徴と意義について、管見を記したい。なお、専門家による整理・分析はなされていない段階のため、文字

通りの管見であることをお断りしておく。

旧制高校時代、敷地内に図書館があるのになぜ寮内に図書室を作ったのかということは、素朴な疑問である。同窓会発行の記念誌には「元来図書室の目的というのは、寮生に学校の参考書を供えて勉強させようとするのではない。疲労した頭脳を休めるのに利用して貰う軽い意味のものであると思う³」とある。大学図書館書庫の旧制静高蔵書と比較すると、なるほど参考書を網羅しているというよりは、当時の現代文学や演劇などの読み物が目立つ。

また図書館は購入した本が蔵書となり、寮には卒業生や先生によって寄贈されているというケースがしばしば見られる。寮図書部の購入書が半分以上を占めるとはいえ、寄贈書の割合は大学書庫より高いのではないだろうか。8月の旧制高校夏期セミナーにてお会いした関口哲生先生(旧制松本高校出身)から「寮の蔵書はコミュニケーションの手段となるような寄贈書がほとんど」という意のお話をいただいたが、旧制静高の場合も近い傾向と言えるかも知れない。寄贈者の一例を挙げると、「堀文庫」ができるほど多数寄贈した堀重里校長、ドイツ語の関泰祐先生、歴史の木宮泰彦先生、東京帝大院卒業



後 37 歳でビルマにて戦死した中村宏、戦後運輸大臣を務めた森山欽司、ヂーゼル自動車工業川崎製造所(写真)らの寄贈書がある。また寄贈者は不明だが「昭和十九年三月十五日京都にて求む。国語に対する愛着益々加わり何とかして此の道へ進みたいと思う。しかしそれも時勢がら出来ない相談だ」という書き込みのある本⁴も見つかる。

このように、旧制高校時代の寮図

書室は学校の運営する図書館とは異なる独自の性格を持っており、さらに整理を進めていくことでその特徴と意義が鮮明に見えてくることも考えられる。

一方、寮図書室に保管されるのは旧制静岡寮蔵書ばかりではない。新制大学後の仰秀寮蔵書、移転後の雄萼寮蔵書までが一括して保管されている。加えて、前述のように寮自治会資料も所蔵している。これらを整理し分析すれば、旧制高校から新制地方国立大学に至る約 100 年間の学生思想史が編めるかもしれない。それは今後の課題である。

《静岡大学雄萼寮関連年表》

和暦	西暦	できごと
大 12	1923	官立静岡高等学校開校, 翌年寮建設
大 14	1925	5つの寮の名称が決定(不二・穆・映・魁・伍)
大 15	1926	自治寮となる。呼称「静高寄宿寮」「静高自治寮」等
昭 8	1933	映寮 1・2 室にあった寮図書室廃止→寮図書館(伍寮の南)の建設
昭 11	1936	5つの寮の総称としての雅号「仰秀寮」が決定
昭 18	1943	自治の解体, 仰秀寮解散式
昭 20	1945	校舎一部・伍寮・寮図書館が静岡大空襲により焼失
昭 24	1949	静岡大学発足, 翌年静岡廃止
昭 44	1969	第 2 新寮(雄萼寮)へ最後の仰秀寮生が移動, 教育学部小鹿寮生も雄萼寮へ, 図書室は 3 階不二寮内に
平 25	2013	定期購読書廃止

年表参考文献

寮史編纂委員会(1932)『静岡寮史』静岡: 静岡高等学校寄宿寮
 旧制静岡高等学校同窓会編(1997)『時じくぞ花: 官立静岡高等学校創立七十五周年記念誌』東京: 旧制静岡高等学校同窓会
 静岡大学 50 周年記念誌編集委員会・通史編小委員会(1999)『静岡大学の五十年』静岡: 静岡大学

《仰秀寮・雄蒨寮の落書き対比》



仰秀寮の落書き(大学アーカイヴズ委員会所蔵, 仰秀寮の落書き帳より, 筆者撮影)



仰秀寮から持ち込まれた雄蒨寮の落書き(図書室, 筆者撮影)

注

- 1 一例を挙げると, ストーム(新歓・卒寮行事において禪・ハッピー姿で市街へ走る), 代表寮歌「地のさぐめごと」(1923年制定), 5つの寮の雅号(不二・穆・映・魁・伍, 1925年決定), 落書きの一部(末尾写真参照)がある。
- 2 中曽根康弘元首相の寮生名簿を含む昭和10年前後の数年分の名簿で, 大学文書資料室の山本義彦名誉教授に寄贈した。
- 3 旧制静岡高等学校同窓会編(1997)『時じくぞ花: 官立静岡高等学校創立七十五周年記念誌』東京: 旧制静岡高等学校同窓会, 82頁より引用。
- 4 新村出(1942)『言葉の歴史』大阪: 創元社。

***このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。**

逸話と世評で綴る女子教育史(46)

—同志社女学校はじまる—

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

新島襄が心に画いたのはアメリカ流のクリスチャン大学であり、彼が心血をそそいで実現したのはその第一歩である同志社英学校であった。彼に女子を教育から排除する考えは勿論なかったが、日本の現状からみて女子の中等、高等教育をはじめめることは考え及ばないことであった。しかるに熊本バンド三十餘名が乗り込んできた明治9年の暮12月、御苑内の旧柳原邸を改造したデヴィスの仮住宅で同志社女学校が始まったのである。

女学校を推進したのはアメリカンボードの宣教師デヴィスである。本シリーズ(43)で書いたように彼はミッション本部に女教師の派遣を要請し、タルカットとダットレーという優れた教師を得て、神戸英和女学校をたてた。その経験から日本にミッション女学校をつくる確かな手がかりをつかんだのである。早速ミッション本部に女教師の派遣を要請した。本部はこれに応じて明治9年4月、スタークウェザー A.J.Starkweather を派遣した。日本で布教するにも学校をつくるにも、有力な日本人を知己に持たねばならない。神戸での伝道、学校建設で九鬼隆義という有力者を得た経験から、デヴィスはこのことをよく知っていた。京都には府顧問の山本覚馬がいた。山本とは新島を通じてすでに知己になっていた。

山本は元会津藩の洋式兵学者である。京都に出て京都守護職松平容保のもとで洋学塾を開いていた。鳥羽伏見の戦いに出陣して薩摩軍に捕われ、入牢した。その時、書いた建白書「管見」が小松帯刀や西郷隆盛の目にとまり、許されて京都府の顧問になったのである。「管見」は将来の日本を予測し

て建設的な諸説を吐いているが、その一つに女子教育の重要性を説いている。デヴィスと山本覚馬は意気投合して同志社女学校開校に向けて動いた。京都府新英学校女紅場で舎監をつとめていた山本の妹・八重(本シリーズ24参照)は9年1月、新島と結婚していたが、この新島夫人八重とデヴィスが呼んだスタークウェザーが、同志社女学校最初の教師である。

明治9年12月、御苑内の旧柳原邸、デヴィスが借りた住居で同志社女学校(まだ正式名称はない)の学習がはじまった。最初に入学した生徒は元三田藩主・九鬼隆義の姪である。デヴィスの紹介であることは言うまでもない。こうして、この女学校はデヴィスの仮住居で始まったが、翌10年4月、京都府に「同志社分校女紅場」の名で開業願いを提出した。提出者は同志社社長・新島襄である。同志社女学校としなかったのはキリスト教主義女学校であることを隠すため、京都府の勸業政策に乗る形での女紅場の名を使ったのであろう。

京都府は新島のキリスト教教育を疑ったが、山本の圧力で年度中に認可された。認可を待たずに新校舎建築を計画し、御苑北隣、今出川町にあった旧二条関白邸6,000坪の地を得て工事ははじめた。当時、公家が東京に移って旧屋敷が荒れ果て、廉価で買い取ることができたからではあるが、これらの費用はアメリカンボードからで



新島襄の家族(新島襄、新島夫人八重、父、母、妹、八重の母山本佐久子)

たものである。かくして11年秋には新校舎が完成し、同志社女学校と名乗って教則を制定した。

生徒定員50名、原則小学校卒業12歳以上で修業年限は本邦科3年、英書科4年である。ほかに小学課程に当る2年制の予備科を置いた。本邦科は和漢書による習字、作文、地誌歴史筆算と代数学、裁縫、家政等。英書科は英語のリーディング、ライティングの外、英書による歴史、文学の学習であった。

教師はスタークウェザーとその後来日したアメリカンボードのパーメリー H.F.Parmelee と新島八重であったが舎監として山本覚馬の母・佐久子が加わった。戊辰戦争で佐久子の夫は会津で戦没した。一家流散の中、佐久子は息子の覚馬を尋ねて娘の八重と京都に向い、幸い三人邂逅して覚馬の家に住んだ。まもなく八重は新島襄と結ばれて受洗し、続いて佐久子も入信した。佐久子が舎監になった時はすでに70歳を超えていたが、それより6年間、舎監をつとめ、生徒から慕われた。

明治18年、本邦科を廃して英書科だけとし25年には予備科1年、普通科4年、専門科2年の文学系の女子専門学校を旨とした。第二次大戦後、女子中学校・高等学校・女子大学になった。

参考文献

『同志社50年史』

宮沢正典『同志社女学校史の研究』

伊藤儀助(二高1926年卒)の旧蔵写真帳を手にして

—伊藤儀助と二高卓球部のかかわり—

たにもと むねお

谷本 宗生(大東文化大学)

このたび、古書店より伊藤儀助(二高1926年卒)の旧蔵写真帳(縦24×横32cm)を入手することができた。この写真帳には、伊藤が二高を卒業して、東北帝国大学医学部生理学教室にて医学士、医学博士(1936年)となり、実験研究に励んでいる様子がうかがえる。写真帳に貼られた切抜き記事には、「智能の神秘を発く空前の実験 電気で知覚作用を探る 東北帝大医学部の新研究」と記されている。記事の内容によれば、「我々の脳において、知覚作用がはたらく時に起る『動作流』は、一万分の一乃至二といふ極めて微弱な力しかないため、従来の電気学ではこれを捕へる器械装置を作ることが出来」なかったという。伊藤らは、「この微弱な電流を捕へる器械装置の入手に成功した」ことが実験研究の契機となったと。電気通信研究所の松平助教授が制作した「電研式真空管増幅器」を介して、次のような実験知見を得たとされる。たとえば、「実験に用ひた動物の例では進化の進んだものほど明瞭で、犬、猫、鼠、兎などそれぞれ差異があり」、「脳の損傷のある部分からは発生しないが、たとへ盲目でもその視領には立派に動作流が生ずる」など示されている。伊藤によれば、「この実験の結果が精神病や脳疾患の診断にすぐ応用の出来る事は確かだし、現在[1930~40年代]の心理学の上にも、もつと生理学的な純粹客観性をもたらし得ると確信している。…そしてこれを応用して行けば、或は飛行機の機体の性能検査よりも、飛行士の性能検査の方が、一足先に来るといふやうな事になるだろう」と語られている。やはり、軍事研究への応用もまた、当時の帝国大学での学問研究の宿命なのであろう。

そんな伊藤は、大正期の二高生時代、二高有志卓球部の一員として1922年、宮城県下団体選手権大会の優勝に貢献し注目される。この当時の二高有志らを母体に発展した全仙台卓球界では、その後県外の東京歯科医専、立教大、農大、早大などの対外試合を行い、伊藤ら二高選手の雄姿も全国的に知られることになったという。昭和期になり二高卓球部が正式に設立され、二高卒業後も伊藤は、二高卓球部の先輩として練習・合宿・試合の活動全般に積極的にかかわっていく。『第二高等学校史』（1979年）の「卓球部」史によれば、先輩である伊藤が「二高卓球部は立派にインターハイで戦えるとの認識を一般に知らしめる事が絶対の必要事」と考えて、二高卓球部の初のインターハイ参加を決行したとされる。結果は、初参加ながらも第3位となって二高卓球の強さが全国的に知られることとなり、卓球部員らの志気も上がる契機となったという（同上書、937頁）。そして、伊藤がヘッドコーチを務めるなどして、インターハイの優勝を目標に合宿・猛練習を重ね、1936年7月ようやくインターハイ全国制覇を遂げる。同上の卓球部史によれば、「遂に宿望の優勝、全国制覇の偉業は成った。…積年の苦節が遂に酬られ、多くの先輩達の悲願がとげられた。インターハイ出場五回目、毎年準決勝で優勝を目の前に見ながら涙をの

*卓球部のインターハイ初優勝祝勝
(伊藤旧蔵の写真帳)



中央一列目:阿刀田令造二高校長
右三番二列:伊藤儀助ヘッドコーチ

んだのであった。これまでのチームに比べ必ずしも強いとは言われないが、西内主将のもと部員一同の固いチームワーク、猛練習、先輩の熱心なコーチが相まっつての優勝であった」と記されている(940頁)。

*二高卓球部寮前にての集合写真
(伊藤旧蔵の写真帳)



右一番一列:伊藤儀助ヘッドコーチ

近代日本における大学予備教育の研究(39)

一二年制予科 関西学院大学①一

やまもと たけし
山本 剛(早稲田大学)

はじめに

同志社大学予科が関西学院大学予科との志願者獲得競争において、大きく差をつけられるとの危機感から、同大学予科教授会が、二年制予科併置を「一層痛切」に要求したことは前号で確認した。

また、一方で同志社大学が文部省に提出した二年制予科設置の理由は、修業年限の短縮は「生徒父兄の要望」であり、志願者は三年制よりも二年制を求めているからである、と主張していた。

いずれにせよ、この時期、大学予科は志願者獲得のための努力を強いられることになったのである。

それでは、その開校時に多くの志願者を集めた関西学院大学予科はどのような理由から二年制予科を設置したのであろうか。また、同大学予科の学科課程はどのようなものであったのか、本号からは、関西学院大学予科を事例として検討したい。

1 関西学院大学予科

1932(昭和7)年3月7日に関西学院大学は認可された。学部は法文学部と商経学部の2学部で、大学予科は当初から二年制であった。

なお、筆者は、現時点で同大学予科の設置過程に関する資料を閲覧できていない。したがって、同大学沿革史で描かれた内容から探ることになる。

関西学院大学は大学予科の設置にあたり、「教育を独自なものにするため、さまざまな角度から慎重に検討された結果、ついに二年制を採用」することになった¹。その二年制採用の理由として、次の2点があげられた²。すなわち、①一年でも早く大学学部を開設しようとしたこと、②三年制にすると中学四年修了からの入学を認めることになるため、同学院中等部の教育体制を乱すおそれが考慮されたこと。

このように同大学では、大学予科の修了者を大学に入学させて、一刻も早く大学を開設するために当初から年限の短い二年制予科にしたのであった。また、同大学予科では、同学院中等部(中学校)からの進学も考慮して、中学校の学習上の教育を保持するために中学四年修了者は入学できない二年制予科にしたのであった。

なお、初年次の大学予科の入学試験では、同学院中等部からは51名の志願者があり、うち21名が口頭試問のみの無試験入学の特典が与えられ、そのほかの者も受験のうえ29名が入学を許された³。

2 関西学院大学予科の学科課程

続いて、同大学予科の学科課程を検討する。

大学予科は、法文学部に進学する甲類と商経学部に進学する乙類が設置されており、学科課程は以下のものであった⁴。

関西学院大学予科の学科課程

学科目	毎週授業時数			
	甲類		乙類	
	第一学年	第二学年	第一学年	第二学年
修身	1	1	1	1
基督教概説	1	1	1	1
国語及漢文	4	4	4	
英語	10	8	10	8
第二外国語	4	4	4	4
歴史	2	2	2	2
地理	2		2	
哲学概論		2		2
心理及論理	2	2	2	
法学通論		2		2
経済通論		2		2
数学	2		2	2
自然科学	2		2	
商業通論				2
簿記				4
体操	2	2	2	2
計	32	30	32	32

この学科課程で注目すべき点は、「修身」とは別に「基督教概説」が設けられていることである。詳しい検討は、次号で述べることにするが、同大学予科の学科課程には、宗教系大学の大学予科として、こうしたキリスト教を学ぶ学科目を設置することが認められたのである。

また、上記の学科課程をみると、甲類、乙類ともに「英語」の授業時間が多い。さらに、甲類では「国語及漢文」、「心理及論理」に、乙類では「数学」にそれぞれ重点が置かれている。そして、乙類には「商業通論」、「簿記」が設置されている⁵。

次号では、この学科課程の内容を中心に検討したい。

注

¹『関西学院七十年史』(関西学院七十年史編集委員会、1959年)、138頁。

²『関西学院百年史』通史編 I (関西学院百年史編纂事業委員会、1997年)、474頁。

³ 前掲書『関西学院七十年史』、131頁。

⁴『関西学院百年史』資料編 I (関西学院百年史編纂事業委員会、1994年)、257頁—258頁。

⁵ 前掲書『関西学院百年史』通史編 I、481頁の記述による。

教育史研究の周辺⑤

学校を經由した社会移動研究(地理移動編①)

かとう よしこ
加藤 善子(信州大学)

麻生のエリート研究をいま読み直す

『人事興信録』をソーシャル・インデックスとして利用した麻生誠の一連のエリート研究は、その方法の斬新さに加え、近代日本におけるエリートの全体像を重層的に描き出した点で、今読み直しても刺激的である。近年の研究が、精緻化しながらもますます細分化されていく状況にあつて、このように全体像を示してくれる研究は灯台のように足元を照らしてくれ、遭難しそうなところを救ってくれるような気がする。

「エリート」の出身地域

麻生は、明治36年から昭和28年まで、約5年ごとの『人事興信録』から等間隔無作為抽出で標本を選び、総数2000人の対象を分析している¹。エリートの多産地域(13%~20%前後)として中部・東京・近畿(大阪を除く)が、寡産地域(1%~5%前後)として北海道と東北、中産地域(6%~12%前後)として関東(東京を除く)・大阪・中国・四国・九州が含まれる。麻生はそれぞれの地域のエリート輩出率も近似的に求めているが、明治から大正にかけて、東京と大阪が平均の実に6倍から7倍の輩出率を持っており、北海道が2.5倍、続いて近畿が1.3倍である。それ以外の地域は平均以下であるが、その地域差は時間的に縮小されていく。昭和38年から39年の時期では、東京の輩出率は平均の2.6倍、大阪は1.2倍、そして近畿が1.5倍で、それ以外は平均以下であった²。

「エリート」の移動パターン

エリートの地域的定着性と移動性を分析するために、麻生は「流動エリート」「土着エリート」「都市定着エリート」の3つの類型をつくり、それぞれについての割合とその推移を算出した³。明治44年の標本200のうち、流動エリートは74件、土着エリートは74件、都市定着エリートは51件であった(不明1件)。流動エリートは昭和39年に135件と単純増加、土着エリートは昭和39年には31件と概ね直線的に減少、都市定着エリートは、昭和9年の62件をピークに、昭和39年には34件に減少する。

これに高等教育学歴を合わせて集計すると、流動エリートにおいて高等教育学歴所有者が群を抜いて多い。昭和20年代以降は、土着エリートにも都市定着エリートにも高等教育学歴所有者が非所有者を抜くが、その全体数の減少を合わせて考えると、高等教育がエリートの流動化に如何に貢献しているかを表すものだと麻生は書いている⁴。

「エリート」の自給・移出・移入

採録されているエリートたちの学歴の有無に加え、出発地と到着地を重ねることによって、それぞれの地域がエリートにとってどのような土地なのかが概観できるのは、やはりインデックスとしての『人事興信録』が持つ優れた点であろう。移出エリートが少なく移入エリートが多い「移入地域」として、東京・大阪・北海道・海外植民地が、移入エリートの割合が少なく移出エリートの割合の多い移出地域として近畿(大阪を除く)・九州・中国・中部(南)・東北が、そして移出・移入の割合の少ない自給地域として、(1)明治4年～大正4年期の中部(南)・近畿(大阪を除く)・四国・大阪、(2)大正10年～昭和3年

期の大阪、(3)昭和28年から32年期の近畿(大阪を除く)がある⁵。ただし、自給率は時代が下るにしたがって下がり、地域間異動が増える傾向は先にも記した通りである。

これからの研究への示唆

これ以上は次号に譲るが、学校を経由した社会移動の研究では、(都市ではない)地方をフィールドとして、ある地域や学校に特定して、その中の子どもや生徒の統計から、誰が移出し誰が留まるかを明らかにする研究が積み重ねられ、学校(特に中学校)が移動ルートになっていることが強調されてきた。そこに、流入先としての東京の研究がいくつかあらわれてきたが、麻生によって示されたこの全体像を見ると、いまだに手が付けられていない領域があることがまざまざと分かる。

私が関心のある東京以外の大都市は、輩出する人材も多いものの土着エリート是自給している傾向があると考えられる。地元での高等教育への進学機会も整備されていたはずであるが、移入はそれほど多くない。高等教育学歴を持つ土着エリートは、全体的には昭和30年頃から増えるのだが、戦前の大都市ではすでに高等教育を持つエリートがある一定の割合で存在していたであろう。このエリートの供給体制は、東京と本質的に異なっているところであり、かつ、土着の意味も地方とは違うはずなのである。麻生は旧商業層が土着エリートの輩出母体だと書いているが(おそらくその直感は正しいのだと思うが)、その実証的な根拠は、残念ながら示されなかった。

注

¹ 麻生誠(1978)『エリートと教育』福村出版, pp.190-236.『人事興信録』

のインデックスとしての特徴や課題については、麻生も言及しているが、増田智子・佐野智也(2017)「近代日本の『人事興信録』(人事興信所)の研究(1)」(『法令論集』275号, pp.1-43.)に詳しい。

² 麻生, 前掲書, pp.193-194.

³ 「流動エリート」は「地方出身または大都市出身でその出身の地域社会を離れて、他の地域へ移動してエリートの地位を獲得した」エリート、「土着エリート」は「地方出身でその出身の地域社会内においてエリートの地位を獲得した」エリート、「都市定着エリート」は「東京・大阪・京都の大都市出身でその出身としにおいてエリートとなった」者である(麻生, 前掲書, p.195)。

⁴ 麻生, 前掲書, pp.195-198.

⁵ 麻生, 前掲書, pp.199-200.

河合榮治郎の「女性の教養」観⑤

すまつ あき
末松 亜紀(聖心女子大学)

先月号では、河合榮治郎の「女性の教養」観の前提となる女性観について概観した。その際、河合が1920(大正9)年4月より2年半にわたり講義を受け持った東京女子大学との関わりについて紹介した。今回は河合や新渡戸稲造と関係の深い、東京女子大学の初期の教育について論じていくこととする。

東京女子大学は、日本で女学校を経営している計10のアメリカのプロテスタント教団による支援のもと、1918(大正7)年に新宿の角筈に開学した。津田梅子による女子英学塾など他の女子高等教育機関と同様に、実質的には専門学校でありながらも「大学」と呼称しており、その名称から理想とする水準の高さが推察できる。創立に携わった人々は、近い将来に専門学校から大学への昇格を目指していたのである。初代学長は、「第一、日本人で熱心なキリスト者であること、第二、国際的視野の広い人、第三、キリスト教以外の世間でも知られている学者であること、第四、女子教育に深い理解を持つ人であること」¹という条件に合う人物として選出された、新渡戸稲造(1862-1933)である。新渡戸は1918(大正7)年4月から1924(大正13)年3月までの6年間、同大学の学長を務めた。しかし1920(大正9)年に国際連盟の事務次長に就任したため、大学を留守にすることも多く、代わりに学監である安井てつ(1870-1945)が大学運営の実質的な中心となっていた。しかし日本にいる間、新渡戸は授業参観をよく行い、時には英語の授業を代行するなど、同大学の教育に熱心に関わったという。

同大学は修業年限1年の「予科」の上に、修業年限3年の「本科」(国語漢文科、英文科、人文科、実務科の4学科)、さらに聴講のみの「別科」が設置さ

れた。なお、人文学科について新渡戸が「西洋のヒューマニズムで、人間としての修養的の学科……高等な常識の養成である。哲学の概要、美術の概略というがごとき心の真をよくする学科を授けたいと思う」と述べていたと伝えられており²、新渡戸が人文学科をはじめ、同大学の教養教育に思いを込めていたことが分かる。

カリキュラムについては、『東京女子大学五十年史』に以下のように記されている。

実践倫理と聖書研究と英語と体操が必ず各科各学年に配当され、その他に修業一カ年の予科では国語、漢文、英語（英文科志望の者には数学の時間を加える）日本地理と日本歴史、数学、唱歌を加えて一週二十四時間、本科では修業三カ年の間に各科共通の学科目として心理学、論理学、哲学概論、教育学及び教授法、文学概論、言語学概論、美術概論、文明史があり、国語漢文科では国語漢文に英語を加えて一週二十四時間、英文科では英語と英文学に国漢を加えて一週二十四時間、人文学科では宗教学概論、経済学、文明史、法学通論、社会学、衛生学を加えて二十三時間、実務科（第一部）では、商業学及び商品学、商業地理、商業算術、経済学、簿記、商業邦文、商業実践等の一週二十三時間、実務科（第二部）では心理学、社会学、経済学、文明史、法学通論、衛生学、工業史、工業及び慈善事業視察等を加えて、一週二十二時間であった。³

上述のカリキュラムの他に、同大学における初期の教育を特徴づけるものは、「課外講演」である。全学生が一堂に集まって聞く「課外講演」が週に一度催された。文学、歴史、政治、時事問題等あらゆる分野にわたり、その道の

第一人者が登壇、講演後は別室で茶話会を開いて質問を受けた。⁴河合は1920(大正9)年6月15日の日記で、「今日は角筈で『恋愛と友情』との講演をする日である。気になりながらもいつもの如く不用意で往って、遂に大失敗をしてしまった。話し方は実に拙であったが、題材は学生の興味を維つないだらしい⁵と記しており、また『東京女子大学五十年史』にも代表的な講演者の中に河合の名前も挙げられているため⁶、上記の講演も課外講演として行われたものと推測される。なお、河合の講演内容であるが、現時点では明らかになっていない。

また、上述した全科必修の「実践倫理」は学監である安井てつが担当し、身近な体験談からキリスト者としての生き方を説いていた。総じて、同大学では講話を聴く時間が多く設けられていたことが分かる。

さて、参考として津田梅子による女子英学塾(現「津田塾大学」)のカリキュラムを見てみよう。東京女子大学と同様に専門学校の認可を受けた1904(明治37)年時点のものであるが、まず「本科」と「師範科」の二つに分かれており、両学科ともに、倫理、国語および漢文、英語(師範科の場合は英語および英文学)、歴史、体操が設置されており、同じく両学科ともに第二学年より心理、教育が新たに課せられている。⁷第一、第二学年は1週間に23時間、第三学年は22時間と、授業時数も同じである。異なる点は師範科の方が英語の授業が2時間多く、また第三学年に英語教授法、実地教授(教育実習)が課せられる一方で、本科では第二学年以降も歴史の授業があることにとどまる。総じて、両学科に大きな違いは見られない。なお、このカリキュラムは1939(昭和14)年に至るまで、大きな変更は見られない。

これら東京女子大学と女子英学塾の両大学のカリキュラムを比較すると、女子英学塾は英語の教員養成を主眼に置いているのに対し、東京女子大

学は学科目の種類が豊富で、旧制高等学校のカリキュラムを思わせるような「哲学概論」や「文学概論」「美術概論」などに代表されるように、教養教育を重視していることが分かる。橘木俊詔も「例えば女子高等師範や津田塾のように教員を養成するといった目的ではなく、あくまで教養の高い、そして人格の優れた女性の育成を主としたのである」⁸と、両大学の違いを指摘し、「一般教養を教えるリベラルアーツの学校としてスタートし、高等な学識を授与することを目的とした」⁹と、同大学の特徴を述べている。

注

¹東京女子大学五十年史編纂委員会 1968『東京女子大学五十年史』東京女子大学, 24頁

²東京女子大学80年誌編纂委員会 1998『東京女子大学の80年』東京女子大学,122頁

³東京女子大学五十年史編纂委員会 1968 前掲書,42-43頁

⁴東京女子大学五十年史編纂委員会 1968 同上書, 48頁

⁵日記 1920年6月15日(社会思想研究会編 1969『河合榮治郎全集』第22巻所収, 13頁)

⁶東京女子大学五十年史編纂委員会 1968 前掲書, 49頁

⁷津田英学塾 吉川利一 1941『津田英学塾四十年史』津田英学塾, 575-576頁

⁸橘木俊詔 2011『女性と学歴 女子高等教育の歩みと行方』勁草書房,75-76頁

⁹橘木俊詔 2011 同上書, 75頁

明治後期に興った女子の専門学校(1)

さきがけ—明治女学校の開校

ながもと ゆうこ
長本 裕子(ニューズレター同人)

女子の専門学校は、日清戦争後の明治 33、34 年ごろ、東京を中心に次々と創立された。専門学校といっても今日のものとは違って、それは高等教育機関であり、現在の大学に相当する内容を教授する女子教育の最高学府であった。女子の専門学校がどのようにして興ったのか書いてみたいと思う。まず、そのさきがけとみられる明治女学校の開校事情からみよう。

明治女学校の設置願は、明治 18 年 9 月、設置者、木村熊二から東京府知事に提出された。設置目的は「本校ハ女子ニ英語及地理歴史生理物理化学動植物鉱物数学修身漢文等ノ諸学科ヲ教授ス」である。入学資格は、小学校全科卒業の者、もしくはそれに等しい学力を有する者で満 14 歳以上 30 歳以下の女子。5 年制で定員は 250 名。授業料は、1、2 年生は月 1 円、3～5 年生は月 1 円 50 銭。寄宿生は授業料のほかに食料及び寄宿費月 3 円を納める。設置願に登録された教員は、木村熊二、津田梅子、人見銀、富井於菟(おと)の日本人 4 名であった。

熊二、植村正久、田口卯吉、島田三郎、巖本善治を発起人として、九段下牛ヶ淵の旧旗本屋敷跡(麴町区飯田町 1 丁目 7 番地)を借り、敷地 385 坪、建物 51 坪余という規模で、熊二が校長、木



木村 熊二

村鏡子(とうこ)が取締となって開校した。開校時何名の生徒が集まったかは不明である。

熊二が書いたと思われる「木村熊二君履歴」と「木村鏡子の伝」、巖本善治が書いた『木村鏡子小伝』を参考に、創立者の熊二、鏡子夫妻について概略しよう。

熊二は、出石藩(現兵庫県)の儒者桜井一太郎の次男として、弘化 2(1845)年京都で誕生。8歳で江戸に出て、15歳で幕府の儒臣河田迪斉の塾に入る。18歳で昌平黌の儒官佐藤一斎に学ぶ。18歳のとき木村琵琶山の養子となった。木村家は御家人であったが、熊二は將軍家茂公の代に殊遇を受けて拜謁以上の家となった。

鏡子は幕府の家人田口耕三の娘として嘉永元(1848)年江戸で誕生。耕三は早くに亡くなり、継父の樫郎に養われた。鏡子は、佐藤一斎のひ孫にあたり、一斎が命名した。継父は鏡子に漢学のほか、武士の妻となる者の心得として、弓馬槍劍の術を学ばせたが、鏡子はいずれもほどなく習熟するほど俊秀であった。継父と母との子(弟の田口卯吉)が生まれて間もなく、継父も亡くなった。

佐藤一斎の長男、慎左衛門は学問を好まず武道を好んだので田口家の養子となり、娘縝子が河田迪斉を婿に迎えていた。鏡子は慎左衛門の孫にあたるが、この大叔母縝子が鏡子を手元に置いて、家事万端を教えた。熊二が徳川に仕えて函館の小吏に任じられたとき、兄桜井勉と河田夫妻とのほからいで、慶應元年、熊二 20 歳、鏡子 17 歳で結婚した。

結婚後 5 日で熊二は幕府軍の一員として長州征伐に向かった。戊辰戦争の前後、熊二は勝海舟の下で隠密として奔走した。慶應 4(明治元)年 2 月に長男祐吉が誕生。幕府軍が敗れた後、家族を横浜に逃がし、熊二は静岡

に身をひそめた。やがて家族を呼び寄せるが、近隣に住む外山正一の勧めで、明治3年12月、森有礼が公使として渡米する一行に同行することになった。熊二 25歳であった。

鏡子は、祖母と母と2歳の祐吉の3人を抱えて静岡の家を守った。生活は苦しく、鏡子は祐吉を背負い、唐詩や和歌を子守歌代わりに聞かせながら、畑を耕し、鶏を飼い、深夜まで機を織った。機織りを近隣の婦人たちに教え、他から注文がくるくらいの腕前になった。そのため近視となった。鏡子の苦勞を見かねて、かつて熊二の上司であった勝が時折援助した。明治5年鏡子は一家を連れて東京に転居し、伯母の旧宅に住む。沼津兵学校で学んでいた異父弟卯吉も一緒に暮らすようになる。卯吉は後に、経済学者、実業家として活躍するほか、東京府会議員や衆議院議員にもなる多才な人物である。幼少期に姉の鏡子が愛情をもって世話してくれたことに感謝し、明治女学校の開校時の発起人となり、終始学校運営を支えた。

明治15年9月、熊二は12年間のアメリカ留学を終えてようやく帰国した。ミシガン州のホープカレッジを卒業後、ニュージャージー州のニュープリンスウィックの神学校で学び、ニューヨーク大学医学部で聴講してきたものの、牧師の免許を得ただけで帰国したことに鏡子は衝撃を受けた。長い間の労苦に耐えたのは、当時の常識として、数年洋行して帰国すれば官僚への道が開けるという一念であった。熊二は、ニューヨーク領事館や外務省への奉職、政界入りを勧められたが、「吾は旧幕の遺臣であって明治の世には無用の者である。社会へ対する仕事は土台石の下にある石の様に人に知られない仕事をすればそれでよいのだ」と言ってすべて断ったという。キリスト教の宣教を決意して帰国した熊二に、やがて鏡子は感化され、15年12月、下谷教会でフルベッキから受洗した。

熊二は 16 年春に植村正久のあとを継いで下谷教会の牧師に就任。17 年夏に駒込西片町に家を新築して、自宅で塾を開き、青年たちを教育した。塾生たちは邸内の建物に息子の祐吉も共に起居し、鏡子は塾生たちと我が子のように接した。その塾生の中に巖本善治がいた。善治は 16 年 4 月に下谷教会で熊二から受洗している。

鏡子は 17 年の秋ごろから教会に婦人会をつくり、日曜学校を開き、少女たちに裁縫を教えた。裁縫で作った製品を売り、そのお金で会堂の用具を購入した。また、衛生上・経済上から束髪会が起こると幹事を務めた。万国婦人禁酒会書記のレヴィット夫人が来京したとき、夫人に感奮して婦人矯風会を設け、我が国の同胞姉妹のために尽くそうと決意した。このような鏡子の行動は多くの婦人に影響を与えた。この婦人会の活動が明治女学校開校の下地となったのである。

熊二が書いたと思われる「明治女学校創立趣意書」がある。原文は約 2000 字の長文、漢文訓読調の名文で、広く同志を募って資金を集めるために作成したものと思われる。概略しよう。

男子を教育する公立中学校は各地に開校されているが、女子は志があっても入学を許されない。わずかに師範学校や学習院があるだけである。文明国では男女共に学校に入って、自由に教育を受け、同一に薰陶されている。我が国では女子に学問は無用として、家庭において裁縫や料理をさせられる程度で、知識は狭く、婚期になってもわずかに仮名付きの新聞が読める程度である。今ようやく婦人の交際が開かれ、服飾や頭髪も変わろうとしている。けれども外貌が変わっても、内面が備わらなければ、才識ある者が敬慕するに至らない。今日、華族士族平民の別なく、小学以上の女生徒を教育する学校の多くは、外国キリスト教信徒の慈善で成立しているものである。しかし、

外国女子の教育法を、そのまま我が国の女子教育に用いるべきではないと考える。

このようなことを熊二が鏡子に語ったところ、喜んで賛同した。鏡子も下谷会堂の婦人会で、婦人風俗の改良のために、キリスト教で婦徳を涵養する学校を起こしたいと協議していたからである。こうして創立された明治女学校は、外国の宣教師団からの資金援助を受けず、同志の寄付と生徒の授業料によって運営しようという理想を掲げたものであった。

参考文献

青山なを『明治女学校の研究』所収

旧東京府公文書—私立学校設置願、木村熊二君履歴、木村鏡子の伝、『木村鏡子小伝』、明治女学校創立趣意書

藤田美実『明治女学校の世界』

大阪市の女子教育⑩

—大阪市立大学家政学部の設置—

とくやま りんこ
徳山 倫子 (京都大学)

1949(昭和24)年2月21日、大阪市立大学は、商学部・経済学部・法文学部・理工学部・家政学部からなる総合大学として設立された。大阪市立女子専門学校を母体として、大阪市立大学家政学部が設置される経緯については、すでにいくつかの先行研究で検討されている¹。本連載の第1回であるニューズレター第9号(2015年9月)でも言及した通り、大阪市立大学家政学部は男女共学の家政学部として日本で最初に認可された。今回は、女子専門学校から家政学部設置に至る経緯について述べることにしたい。

1948(昭和23)年7月末、大阪市立新制大学設置準備委員会での審議を経て文部省に提出された申請書では、大阪市立女子専門学校を大阪市立大学の附設女子大学の生活学部として設立することが計画されていた。この理由については以下のように述べられている(下線は筆者による)。

文化の薫り高い民主的な新日本を建設する最も基本的な方途として新教育理念に拠る改革が協力に推進されねばならぬ。なかんづく重要な問題は女性の教育であって、アメリカの教育使節団報告書中にある如く『現在準備のできている女子に対して今直に高等教育への進学の自由が与へられなければならぬ』と力説されている。かくして女性の知性教養を向上せしめ、社会的地位を実質的に男子と均等にすることが根本問題である。最近に至って、各大学に於て男女共学が強力に実施せられんとしていることは、この意味に於て当然のことであり、甚だ喜ばし

いことであるが、この種の大学と並行して女子本来の特性を十二分に伸張させ得るような新制女子大学を設置することは、女性教育完成の上まことに意義の深いことと云はなければならない。女性が実質的に各方面にその地位を向上し、家庭生活の中に科学的知識を採りいれ社会集団生活を合理的にかつ健全に育成することは、人類の進歩世界の恒久平和のため、欠くことの出来ない要素である。(中略)さらにまた現今の家政学あるいは生活科学と称せられるものは内容極めて雑多であり、教育的に合理化された組織あるいは学的体系が確立されなければならぬものであり、また当大学に課せられた大きな使命である。²

同文では、男女共学の大学設置の意義を認めてはいるものの、「女子本来の特性を十二分に伸張させ得る」ような女子大学の設置が必要であることが主張され、女子特性論にもとづく女子大学の設置が目指されていることがわかる。そして、この女子大学は家政学および生活科学の学問的な体系化を担う存在であるとも述べられている。

ところが、この女子大学構想は文部省との折衝の過程で大幅な変更が加えられ、附設女子大学ではなく大阪市立大学の一学部としてでない設置が認められなかった。この背景として、GHQの指導が影響力をもったと考えられているが、附設女子大学が否定された明確な理由は不明である³。

このような経緯を経て設置されたため、同校は期せずして男女共学となった。これと関連して湯川次義は、「(女子専門学校から:筆者補足)単独昇格した公立女子大学で女性への特性教育が強調されていたのに対して、大阪市立大学の付設女子大学構想を除いて、これらの大学(男女共学の公立大学を指す:筆者補足)において特性教育論はほとんどみられず、また学則上

の目的にも特性教育的文言が規定されることはなかった」とまとめている⁴。つまり、戦後教育改革期における旧制女子専門学校が大学「昇格」を目指す際の理論としては、女子の高等教育機関への進学機会の拡充を前提としたが、その先の理論は大学により異なっており、男女共学と女子特性論の両者が有用なロジックとして存在していたと言えよう。

男女共学となった同校には、男子生徒も入学した。期せずして男性に家政学分野への門戸を開くことになったのである⁵。新制大学の家政学部は多くの女子大学で設置され、その後も女子教育の領域と密接に関わってきたことは言うまでもない。そのなかで男子にも門戸を開いた珍しい家政学部の開設が、女子大学としての設置が叶わなかった結果もたらされたというのは皮肉な展開であった。

これまで本連載では、1900年代の手芸学校の設置から大阪市立大学家政学部の開設までの流れを辿ってきたが、同校に関する検討はひとまずここで締め括り、次回からは大阪市内に設置された他の市立学校における女子教育について検討していきたい。

注

¹野坂尊子「女性にとっての戦後高等教育改革—新制大学創設期における家政学研究の出発／大阪市立大学・東北大学・広島大学—」『大学教育学会誌』21(2)、1999年。湯川次義「戦後教育改革期における公立女子専門学校の共学大学化に関する一考察—男子系高等教育機関との統合過程と専門領域に着目して—」『早稲田大学大学院教育学研究家紀要』27、2017年。

²大阪市立大学百年史編集委員会『大阪市立大学百年史部局編下巻』大阪市立大学、1983年、825-826頁。

³前掲『大阪市立大学百年史全学編下巻』827頁、前掲「戦後教育改革期における公立女子専門学校の共学大学化に関する一考察」97頁。

⁴前掲「戦後教育改革期における公立女子専門学校の共学大学化に関する一考察」103頁。

⁵ただし、同校に入学する男子学生のなかには医学部進学を目指す者も多く、面接で将来の志望などを尋ねなければならない状況であったという(前掲「戦後教育改革期における公立女子専門学校の共学大学化に関する一考察」102頁。)

京都帝国大学創立期における寄宿舎像の模索

とみおか まさる
富岡 勝(ニューズレター同人)

前号でお知らせしたように10月8日に若林あかね監督の「建築ドキュメンタリー 吉田寮が寄宿舎と呼ばれていた時代の自治 銀杏並木よ永遠に」の上映会が高槻市生涯学習センターで開催され、幅広い年齢層の20数名の人が集まり、1950年代の京都大学寄宿舎と、現在の吉田寮の寄宿舎生活について思いを寄せ、意見交流も行われた。

この上映会に、「京都帝国大学における寄宿舎の位置づけと自治」というテーマで話をする時間に恵まれた。これまで明治期・大正期の京都帝大寄宿舎について調べてきたことを研究者以外の人にも聞いていただく貴重なチャンスと思い、以下のようなレジュメを用意して話をしてきた。

レジュメ

建築ドキュメンタリー 吉田寮が寄宿舎と呼ばれていた時代の自治
銀杏並木よ永遠に 上映会(2018年10月8日)

話題提供 「京都帝国大学における寄宿舎の位置づけと自治」

富岡 勝

(近畿大学教職教育部

tomiokamasa@kindai.ac.jp)

自己紹介

1964年神奈川県大和市に生まれ、名古屋で育つ。

東海中学・高等学校出身(弓道部、クラス活動、文化祭、生徒会活動などに熱中)

1983年～1989年 京都大学吉田寮で生活(寮自治の面白さと難しさを体験)。

教育学部卒業、教育史専攻

1989年～1994年 京都大学室町寮で生活、教育学研究科学修認定退学、教育史専攻

1998年～2001年 京都大学百年史編集史料室室員(助手)

2001年から近畿大学教職教育部常勤講師。

現在同教授、近畿大学創立精神に関する史料などを扱う建学史料室研究員を兼

京大吉田寮(京都帝国大学・京都大学寄宿舍)関係での研究

1. 「京都帝国大学における寄宿舍「自治」の成立とその変化」(『日本の教育史学 教育史学会紀要』第38集、1995年)

- はじめに 1. 創立直後の不干渉方針 2. 明治30年代後半の学生風紀
3. 「切磋団体」としての寄宿舍「自治」の成立 4. 「切磋」活動の停滞
5. 菊池総長による寄宿舍方針の転換 6. 寄宿舍「自治」のゆくえ

2. 「学生団体「自彊会」による京都帝国大学の校風改革運動」(『京都大学文書館研究紀要』第2号、2004年)

- はじめに 第1章 自彊会の発足 第1節 発足の経緯 第2節 一
高出身者中心の会員構成 第2章 自彊会の活動 第1節 会員同士の
親睦活動
第2節 寄宿舍改革 第3節 学内外での講演会 第4節 『学界之先蹤
青年修学指針』の出版 第5節 分科大学親睦団体発足への影響 第6
節 木下総長からの評価 第3章 活動の衰退 第1節 新規入会者の
変化 第2節 活動の停滞 第3節 寄宿舍内での影響力低下 第4
節 大学との関係の変化
第5節 「寄宿舍自主解散」後の自彊会 第4章 自彊会の果たした役割

3. 『京都大学百年史 資料編2』での寄宿舍関係史料の解題執筆(別紙)

4. 京都大学新聞 「吉田寮物語」(全6回)の編集に参加

- 「吉田寮物語」第1回 『京都大学新聞』第2238号 1999年4月1日
「吉田寮物語」第2回 『京都大学新聞』第2244号 1999年7月1日
「吉田寮物語」第3回 『京都大学新聞』第2248号 1999年9月1日
「吉田寮物語」第4回 『京都大学新聞』第2256号 2000年1月16日
「吉田寮物語」第5回 『京都大学新聞』第2266号 2000年7月1日
「吉田寮物語」第6回 『京都大学新聞』第2313号 2003年2月16日
(「吉田寮物語」に富岡の書いた論考と年表(1959年まで)は別紙)

本日はお話ししたいこと

・近代日本で使われ始めた「自治」の語は大別して二つの意味

(参考 石田雄『一語の辞典 自治』三省堂、1998年)

①自由と近い意味…自由民権運動期から

②明治憲法体制期の地方自治

…政治の方針を決めるのは国家で、それを地方有力者層で支える

(≒ 学校が決めた方針を上級生が忠実に実行する?)

・しかし、実態は①と②は完全には分離していないことが多かったのではないか?

- ・京都帝国大学創立期において、寄宿舎をめぐる位置が短い時期にゆれ動いた。「自治」がキーワードで、その中身は微妙に変化しつつも共通点もあったのではないかと。
- ・旧制の帝国大学において、寄宿舎を長期間にわたって重視したのは京都帝国大学だけ。

京都帝国大学寄宿舎は、官立大学における数少ない教育寮としてユニークな存在。「京都大学における教育上の挑戦の一つであった」のではないかと？

- ・戦後も現在も京大寄宿舎・吉田寮は、「寮の教育的役割を模索する挑戦」が継続しているのではないかと。

当日は、特に京都帝国大学創立期の3人がそれぞれ微妙に異なる寄宿舎像を持っており、それが実際の寄宿舎にも影響したことについて強調して説明した。概要は以下の通りである。

初代総長木下広次(在任期間1897年～1907年)

木下総長は学生には「細大注入」の方針はとらず、「自重自敬」を求める方針をとった。その一環として、1906年1月、寄宿舎を「規律アルーノ切礎団体」を組織する「研学修養上ノ重要ナル一機関」とであると位置づける告示を発し、寄宿舎を学生の生活上の便宜を図る施設というだけでなく、学生が生活しながら「切礎団体」をつくって活動する学内の重要な教育機関として重視することを宣言した。この告示以後、寄宿舎生たちは「規律アルーノ切礎団体」としての生活に関する規則なども舎生同士で協議して決定して日々の生活の諸問題を自治的に解決し、関心事を発表しあう茶話会や回覧雑誌などを通して交流を深めていった。

第2代総長岡田良平(在任期間1907年～1908年)

岡田総長は、全学生を対象とした特別講義をおこなうなど、学生が「高貴なる品性」をもつことを目指した。寄宿舎に対してもイギリスの大学寄宿舎と同様、人格修養の場として位置づけて重視する姿勢を表明するとともに、寄宿舎増設計画を打ち出したが、木下総長が重視した舎生の「切礎団体」については殆ど言及していない。

第3代総長菊池大麓(在任期間1908年～1912年)

菊池総長も学生の品性修養を重視し、菊池総長の任期中に全学規模での講演会・大茶話会・雑誌発行などをおこなう学生・教職員の親睦組織「以文会」が成立している。しかし、寄宿舍に関する具体的な方針では、寄宿舍増設計画が寄宿舍建替計画に変化し、従来の一室四人制に代わって一室一人制が採用され、これまでの舎生が関与した入舎選考が改められ、学業優秀な学生などを優先して大学が入舎生を優先的に入寮させる方針が打ち出されている。

つまり、初代の木下総長が打ち出した、舎生の「切磋団体」を重視するという寄宿舍観が次第に薄められ、大学の寄宿舍観は短期間に変化していったといえる。しかし、その後の寄宿舍の経緯を調べてみると、寄宿舍を教育上の重要な施設として位置づけるという考え方は、京都大学では少なくとも戦前期を通して継続していったということが推測できる。管見では、明治から戦前期を通じて寄宿舍に力を入れていた帝国大学は、おそらく京都帝国大学である。例えば有名な北海道帝国大学の恵迪寮は、1923年以降は本科生ではなく予科生を対象としていた。京都帝国大学では、少しずつ方針を変化させながらも、官立大学教育における重要施設として寄宿舍をどのように充実していったらよいか、試行錯誤が続けられていったと考えることができるだろう。

現在の吉田寮は、菊池総長の時期の1913年に建て替えられた寄宿舍の建物である。旧制大学期からの寄宿舍教育のユニークな歴史とつながっている点でも、京都大学学生寄宿舍吉田寮は興味深い。

我流・文献紹介(7)

—6・3・3制の強行と「学習指導要領」の作成

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

米国教育使節団は1946年3月30日、マッカーサー総司令官に「報告書」を提出し、翌31日帰国した。総司令部G・H・Qは4月7日、「報告書」を公表した。日本政府は直ちに教育改革にとりかからねばならなくなった。さし当って5月29日、「新教育指針」を公表して改革のアウトラインを示したが、6・3・3制の学校体系に改革するには、これまでの「国民学校令」「中等学校令」「青年学校令」等を廃止しなくてはならぬし、新しい学校法令をつくらなければならない。そのための教育刷新委員会(後の教育刷新審議会)を同年8月10日に設置した。この委員会が「教育基本法」「学校教育法」の原案をつくり、国会の審議をへて47年3月31日公布、同時に「国民学校令」「中等学校令」等の旧令を廃止したのである。

新しい小学校、中学校、高等学校の「学習指導要領」をつくる作業は文部省の任務であった。文部省の幹部は早くから総司令部と接触していた。占領がはじまった45年10月から総司令部G・H・Qは日本人教員の軍団主義者や国家主義者を追放する、いわゆる教職追放や学校から神道教育を排除する指令、また修身、日本歴史、地理の停止などの命令を出していた。その担当はG・H・Q内の民間情報教育局CI&Eであった。CI&Eは命令を文部省を通して出すから、CI&Eと文部省幹部間の意思の疎通はできていた。教育使節団報告書作成に当ってCI&Eと文部省幹部が協力したのは明らかである。そうでなければわずか一ヶ月の滞在であれだけのレポートが書けるわけがない。さらに東京帝国大学の教育学者が協力したとも言われている。阿部重孝

教授は早くからの6・3制論者であったし、学習指導要領執筆者に東大教育学科の出身者が多い。

大戦直前につくられた「国民学校令」「中等学校令」「青年学校令」のローガンは超国家主義、軍国主義に色どられているが、中身をよく読むと理科や技術教育の振興であり、なによりも学校教育を大衆に広げようとしていた。これらのことを刷新委員会の委員たちはよく知っていた。刷新委員会38名の大多数は大学・専門学校の学長・校長であったが、国民学校校長1人、中学校長2人、青年学校長2人が加わっていた。6・3制の即時実施を主張したのは青年学校校長であった。「青年学校令」は同年齢の大多数を占める勤労青年に高等普通教育と職業教育を授ける学校で狭き門であった中学校、高等女学校の中等教育に風穴をあけたので多くの勤労青少年から喜んで迎えられたのである。しかるに開校した直後に学徒勤労働員令が下り、敗戦直前の「決戦教育措置要項」で青年学校は開店休業になってしまったのである。6・3制の新しい中学校は国民学校高等科と青年学校を結びつけて全日制の学校にすればなりたつと考えた二人の青年学校長は6・3制の中学校案を強く主張し、新制中学校の実施を強く訴えた。刷新委員会の多数を占める大学学長、専門学校校長もこの意見に同調し、新制中学校の即時実施が委員会の意見となった。予算の裏づけのない新制中学校の即時実施に政府が驚愕し、延期を訴えたことは前に書いた。しかし青年学校長としては、勅令で青年学校を決め、実際に開校して教員も生徒も決まりながら、そのまま立ち消えになっては立つ瀬がないのである。もともと青年学校は夜間定時制で、独立の校舎はなく、国民学校に同居したり、工場の一棟で学んだりしたのであるからこの時点では設備の整った新校舎など望まなかったのである。一方、CI&Eや文部省の幹部たちはSecondary Education for All の

世界的風潮を知っていたから新制中学校の即時実施を主張した。こうして6・3制の新制中学校は政府の延期説を押し切って即時実施に決った。即時実施の強行論者・東京都青年学校長・牛山栄治は後年“なにがなんでも新制中学校を発足させねばならなかった。そうでなければ形ばかり入学した国民学校高等科と青年学校の生徒は立腐れになってしまう。施設や設備などどうにでもなるものだ”と述べている(「座談会 6・3制の生いたち」全日本中学校長会編『中学校10年の歩み』1957年)。動乱に生きてきた野人的教育者の面影を感じる。余談ながら私はこの教育刷新委員会の青年学校長の二人に偶然にも面識があった。一人は有賀三二氏(小平青年学校長)で、この人は私の旧制中学校の友人の父上で、旧友のお宅でお会いした。牛山栄治氏はその後、都内の新制四谷中学校の校長をしていたが、私が都内私立女子高校の校長代行をしていた時に、同じ学校法人の短期大学の非常勤講師で教育学を講じていた。校内で顔を合わせれば会釈したが、懇談したことはなかった。悔やまれる。

話を元に戻そう。はじめから6・3制の早期実施を考えていた文部省の中堅幹部たちは新制小学校・中学校・高等学校のカリキュラムの試案、即ち「学習指導要領」の作成に精力を集中していた。CI&Eの幹部が助言したり、指示したりしていた。アメリカのCourse of Study に当るものを「学習指導要領」とし、curriculumを「教育課程」と訳した。いずれもこれまでにない教育用語である。戦後の教育学会で、これらのコトバが飛び交い、議論が湧いたことを覚えている。1947年2月には新制中学校は47年4月から、高等学校は48年、大学は49年度から実施すると決った。文部省は47年4月の開校に間に合わせるべく鋭意努力したが、間に合ったのは小学校・中学校の「学習指導要領一般編」(試案)と「英語編」だけで、これを3月20日に公刊して他の「学科編」

は逐次刊行することにした。因みにその刊行状況を述べれば「算数数学科編」と「家庭科編」が同年5月15日、「社会科編」と「図画工作編」が5月20日、「理科編」が6月20日、「音楽編」が6月25日、「保健体育編」に当る「学校体育指導要項」が7月15日、「職業指導編」が11月4日、「国語科編」が12月20日に刊行された。さらに「職業指導編」の各科をみれば「農業編」が11月4日、「工業編」が12月13日、「水産編」が12月20日、「商業編」が12月23日で、実にこの「学習指導要領」は新制中学校開校後ほぼ一年もかかっているのである。「学習指導要領」をもとにして教科書ができるのであるから、新制中学校開始の第一年目、即ち1947年は殆んど教科書なしで授業を行ったことになる。その実態は次回に述べよう。

以上6・3制発足までの政治的行政的経緯は仲新著『日本現代教育史』（第一法規教育学叢書1）と三羽光彦『六・三・三制の成立』（法律文化社岐阜経済大学研究叢書9）によって書いた。「我流・文献紹介」として推せんする。

さて、「昭和22年版・学習指導要領」である。述べたように各冊ばらばらに刊行されたので全部小冊子である。紙質も悪い。全国の小・中学校に配られたので、当時から続く小・中学校や市町村教育委員会に保存されて然るべきである。しかし70年もたった現在では望むべくもない。この間の移転や校舎改造にその理由をあげるであろうが、実際はこのような記録保存に意を払わない関係者が多いのである。頼むは大学の教育学部・学科であるが、これも覚つかない。「米国教育使節団報告書」と同様に講談社の『近代日本教育制度史料』第29巻と30巻に全文載っている。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項(2015年6月15日現在)

- 1.(目的)広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
- 2.(記事のテーマ)記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
- 3.(刊行頻度・期間)研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
- 4.(編集委員会・編集世話人)発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
- 5.(執筆者)執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
- 6.(記事の責任)記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
- 7.(記事の種類・分量)記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
- 8.毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
- 9.ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
- 10.ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
- 11.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

読売新聞に、政治学者@佐々木毅さんの半生「学問と政治」が連載されていて、ちょうど恩師@福田歓一先生とのかかわりの箇所がとても興味深いと感じました（「時代の証言者」欄『読売新聞』2018年9月25～26日）。東大法学部生であった佐々木さんは、政治コースを選択したそうですが、福田先生から「ちゃんと法律を勉強しないようなものが、政治学をやっているとかな」とよく叱られたよし。また福田ゼミ演習では、ホプソスの「リバイアサン」の原典講読で、「君ら学生は英語がよく読めていない。古典というのは、1つ1つの言葉に意味があるから、感性を研ぎ澄まさないと言ったことにならない」と、繰り返し指摘されたそうです。その結果、佐々木さんらは学生時代に「本（古典）を読む」とはどういうことかを体験的に学ぶことができたといいます。学問的に厳しい恩師からの適切な指導を経て、政治学の研究者の道を進んでいく道筋がよくかええます。（谷本）

恋愛小説などで知られる京大出身作家、瀧羽麻子の「左京区」シリーズ（『左京区七夕通東入ル』2009年刊、『左京区恋月橋渡ル』2012年刊、『左京区桃栗坂上ル』2017年刊）の登場人物が住む京都大学の学生寮は、位置関係などから見て、吉田寮がモデルになっている。小説のなかでは少人数の男子寮であったり、大人の「料理長」「管理人」「寮長」が寮生活を支えていることなど、現在の吉田寮とは設定が変えられている部分はあるが、作者の過ごした21世紀初頭の京都大学のなかでの吉田寮への印象が小説のなかで活かされているように感じた。学生生活をリアルに描くことに成功した物語のひとつとして紹介したい。（富岡）



先日、ふと日本経済新聞を読んでいたら、江戸時代の書籍に含まれている人間の毛髪分析から、江戸と関西上方とで暮らす庶民の雑穀食の地域差があることが示されていて驚きました(「江戸期の雑穀食 東高西低」『日本経済新聞』2018年8月15日、32面)。AIなどの技術革新によって、今まで予見されなかったことが科学的に解明され始める一例なのかもしれませんね。さて、テレビアニメ@ルパン三世の2018年シリーズ23話「その時、古くからの相棒が言った」から、最新AIヒトログの解析普及によって、ルパン一味が大ピンチを迎えるなか、相棒@次元大介が、時代の変化に対峙するルパンにもう引退をしたらどうか?と詰問するシーン。ネタバレ?は厳禁ゆえ、ルパンはカリオストロの城の如く、ルパン三世として自分の物語を演じることに、自分を信じて最後まで拘る姿勢を堅持しよう!という。実は、影の相棒@銭形警部も同話で後輩にこうつぶやいています。物理的な逮捕拘束なんかより、俺はルパンの心をしっかりこの手でつかまえたいただけだ。我われ@現代人もまた、AIの急速な進展を前にして、正直たじろぎ戸惑うことも多々ありますが、みかたを少し変えてみると、付き合いかた1つで、自身と取り巻く世界の関係も前向きになにか変われる機会なのかもしれませんね。(谷本)

今月号よりニューズレター同人の仲間入りをさせていただくことになりました。日本女子大学大学院(修士課程)を修了して、旧東京文化学園(現新渡戸文化学園)の中学高等学校で36年間教員をしておりました。その間研究からは全く遠ざかっておりましたし、教育学が専門ではないのですが、明治時代後期に発生した女子の専門学校について書いていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。(長本)

科研費の申請書を大慌てで書いています。今年は準備不足で、一年休んでじっくりと取り組もうと思っておりましたが、申請しないと業績評価から50点マイナスになる(!)と知らされ、必死のパッチです(笑)。ここしばらくは業務メールも少なく、職場がなんとなく静かなのは、きっとこういうわけなのでしょうね。(加藤)

東京女子大学や津田塾大学の沿革史を読み進めるなかで、沿革史の面白さに気がつきました。これから様々な(特に女子高等教育)の沿革史を見ていこうと思います。(末松)

今月号から関西学院大学について調べております。実はまだ関西学院大学に行ったことがありません。美しいキャンパス!なんとか時間をみつけて、資料の調査に行きたいです。(山本剛)

本号から神辺先生のご紹介で、長本裕子さんに同人に参加していただくことになりました。また、コラムは、松本市で行われた第23回旧制高校記念館夏期教育セミナーでお目にかかった猪瀬貴大さんにお願いました。卒業までにご自分が学んだ場について役に立つ記録残しておくというのは素晴らしいと思います。新しい出会いに感謝しています。さて私自身のことですが、連載している「教育における自治」をお休みしてしまいました。次号も別の記事になるかもしれません。恐縮しつつもこのニューズレターでは「書きたい記事を優先したい」と考えています。なお、今回の記事で報告しました上映会の第4弾が、以下の日時・場所でも開催されることが決まりました。

「吉田寮建築歴史ドキュメンタリー鑑賞会」第4回

日時:2018年11月10日(土) 15時30分~17時30分(15時開場)

場所:イサオビル2階ホール(大阪市西区新町1-12-23)

ゲストスピーカー:川野正嗣(現役の吉田寮生)、富岡勝(近畿大学教員)

主催:新町シネマクラブ 協力 NPO法人青空会議

今回は大阪市内です。高槻での上映会同様、現役寮生のトークに続き、寄宿舎史の話をする時間とっていただきました。会場一体となった意見交換もあります。ご関心のある方は、ぜひいらしてください(富岡)

本ニューズレターPDFファイルをダウンロードして印刷される際、Adobe Reader などのソフトの「小冊子印刷」機能を利用してA4サイズ両面刷りに設定すればA5サイズの小冊子ができます。